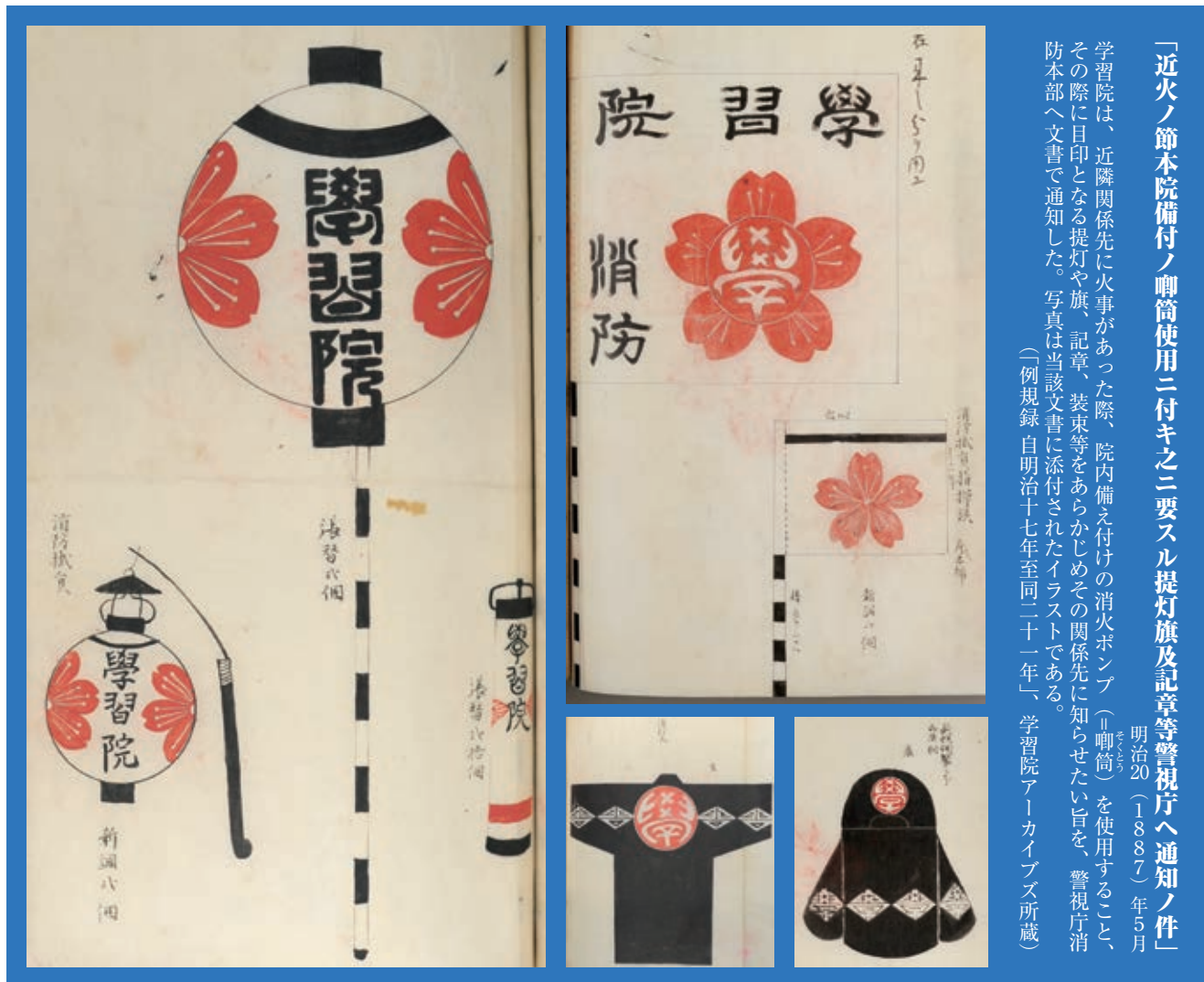


学習院アーカイブズ ニューズレター

Gakushuin Archives Newsletter 2021.2.20 vol.

17



「近火ノ節本院備付ノ唧筒使用ニ付き之ニ要スル提灯旗及記章等警視庁へ通知ノ件」
 明治20（1887）年5月
 学習院は、近隣関係先に火事があった際、院内備え付けの消火ポンプ（「唧筒」を使用すること、その際に目印となる提灯や旗、記章、装束等をあらかじめその関係先に知らせたい旨を、警視庁消防本部へ文書で通知した。写真は当該文書に添付されたイラストである。
 （例規録 自明治十七年至同二十一年」、学習院アーカイブズ所蔵）

Contents

今は無き偉大な基地 … 学習院大学年代測定室	
学習院アーカイブズ	近藤 順子 …………… 2
「財団設立関係資料」 —私立学習院を支えた人たち—	
学習院アーカイブズ	桑尾光太郎 …………… 4
明治期、学習院が独自の外国語教科書で学ばせたかったもの	
学習院アーカイブズ	小根山美鈴 …………… 6
主な活動（2020年7月～2021年1月）	…………… 8

今は無き偉大な基地 … 学習院大学年代測定室

学習院アーカイブズ 近藤 順子



「年代測定室」記念プレート

年代測定室

目白キャンパス南1号館の西側に、「年代測定室（ ^{14}C 年代測定発祥の地）」と記された一つの記念プレートが立っています。

1957（昭和32）年から2001（平成13）年まで、ここでは学習院大学理学部の木越邦彦教授（1919年～2014年 享年94歳、以下「木越教授」）によって、生物の遺骸に残留している放射性炭素（炭素14・ ^{14}C ）量から生物の生きていた年代を測定するという研究が行われていました。生物の体の中に含まれる放射性炭素は、死後、5730年ごとに半減していくので、動物の死骸や植物の年輪などに含まれる炭素のうち、放射性炭素の濃度を測って導き出すものです。

放射性炭素年代測定は、米国のリビー博士^(註)によって始められ、日本では1954（昭和29）年に東京大学、理化学研究所、学習院大学が協力して研究をスタートしました。その後40年以上にわたる学習院大学年代測定室での研究と測定では、海外も含めた大学、研究機関などから測定依頼が木越教授のもとに次々届き、なんと合計2万件以上もの年代測定を行ったということを知り驚きます。測定データにつけられた通し番号の頭の「GaK-」という測定コードは、研究機関「学習院大学理学部年代測定室」を表し、海外でも地質学・考古学など幅広い分野の研究者に広く認知され、佇まいは地味であっても大変偉大な基地でありました。

木越教授は、1955（昭和30）年に文部省の科学研究費を得て放射性炭素測定用の装置のキットをアメリカから購入し、これをもとに独自の測定装置を組み上げて学習院大学での年代測定を開始しました。初代の年代測定室は、この装置を収容するために1957（昭和32）年に延床27㎡の小さい建物が建てられ、1965（昭和40）年に約130㎡に増築後、1975（昭和50）年5月には学習院百年記念事業の一つとして、高精度の年代測定のための特殊な設備を備えた三代

目の測定室（鉄筋コンクリート造2階建て・294㎡）が建設されました。この建物は、2009（平成21）年に、現在の南7号館建設に際して撤去されましたが、年代測定の業務が終了した2001年以後の2004年から2007年までの間、学習院アーカイブズの前身である院史資料室が使用していたという歴史もあります。

外部から委託された膨大な数の炭素14の年代測定は、一つの「事業」であり、木越教授の指示のもとで数名の専門的な知識と技術を持った専属スタッフが作業に従事していました。木越教授は複雑な測定作業のうち、決まった手順の部分を手力から解放するため、当時（1975年頃）市販され始めたIC（集積回路）の使い方を独学で勉強して、自動制御のシステムを作り上げました。この自動化なくしては、2万件を超える測定は不可能なことであったでしょう。しかし、自動化されても省くことの出来ない作業は、試料ごとに異なる前処理の部分でした。最適な前処理方法を決めるには深い見識が必要で、木越教授自身が依頼者とのやりとりに時間を費やした大切なステップでした。



三代目建物内「測定室」で作業中の木越教授。壁にかけられているのは、測定する試料気体を入れたフラスコ。
(1986（昭和61）年、『学習院大学案内』より)

また、初代から三代の建物全てに関して、装置の核心部分は木越教授が設計をし、自作、あるいは学習院大学理学部の工作工場の助けを得てこれを形に作り上げていきました。この手作り装置こそが、高い精度の測定を可能にした独自のものであり、まさ

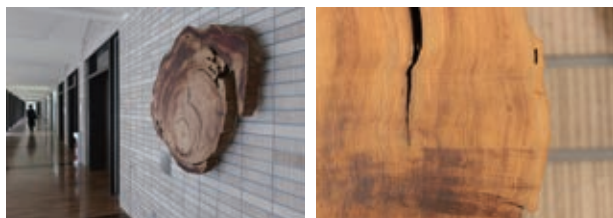
に「研究の道具は自分でつくる」という学習院大学理学部の伝統を示す素晴らしい例と言えるでしょう。測定装置の一部は国立科学博物館に保存されています。

屋久杉の年輪

年代測定室の記念プレートを通り過ぎ、南7号館1階入口を入るとすぐに、壁面に掛けられた直径約1メートルの大きな輪切りの木が目に入ります。これは、過去の大気中の炭素14濃度の変動を明らかにする研究に用いられた、樹齢1632年の屋久杉年輪試料です。確実に年代が分かる年輪、そこに残留する炭素14の量から、過去における太陽活動の変動や地磁気の変化との関係が考察でき、さらには超新星の爆発の痕跡探索、地磁気の逆転現象、気象など、さまざまな研究へと発展していきました。

この測定においても、ぎっしりと詰まった屋久杉の年輪を、スタッフが外から順に一枚ずつ丁寧に削っては、そこに含まれる炭素を取り出して年代を測定していました。大変根気のいる作業です。

我々も近くで見ることの出来る大変細かく美しい年輪は、遥かなる壮大な時間をその中に閉じ込めており、大きなロマンを感じさせてくれます。



南7号館1階の屋久杉の年輪試料。美しい年輪が重なる。

貴重なデータ

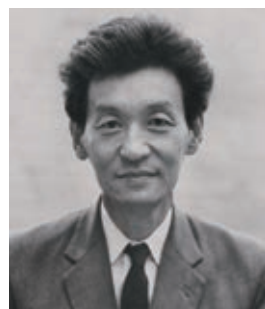
年代測定を行う研究機関は現在世界中にあり、測定データの詳細をどの国の研究者でも常時見られるように公開する義務があります。学習院大学の年代測定室も同様です。現在も学習院大学理学部のホームページからそれを確認することができます。

https://www.sci.gakushuin.ac.jp/facilities/nendai_data/
(アクセス日:2021年2月1日)

2万件を越す全測定データの詳細な記録が、依頼者と交わされた書簡等の貴重な資料と共にここに収められています。この測定データを記録したファイルの原本もまた国立科学博物館に保存されています。

木越教授は、1990(平成2)年の定年後も2001年まで大学名誉教授として年代測定室で測定を続け、そ

の後もお研究への熱い情熱を一生涯持ち続けられました。



木越邦彦教授
(1971(昭和46)年大学卒業アルバムより)

年代測定室は、木越研究室の中心であり、「他の建物で研究や実験をしている学生達も、セミナー時はここに集まって研究の発表や論文の解説を行い、先生や先輩の痛烈な批判の洗礼を受けていた。」「お昼になると、お料理の良い匂いが立ち込め、ありとあらゆる話題が飛び交う学生達やスタッフのための温かいサロンであった。」そのような雰囲気の間所であったようです。

木越教授を中心に、年代測定室を基地として行われた膨大な炭素14の研究・測定は、既にキャンパス内に建物は存在しなくとも、関わった多くの人々の記憶の中に、そして細かいデータをまとめた記録の中に、今後も学習院の歴史としてしっかりと残っていくことでしょう。そして同時に、これから進められる研究へと太く繋がっていくに違いありません。



1975(昭和50)年竣工の三代目年代測定室。2階部分に入口のある北側(上写真)と南西側外観(左写真)。斜面に建ち、この建物の中枢である「測定室」は地中に埋もれた部分の北側1階に造られた。

註: Willard Frank Libby (1908-1980、1960年ノーベル化学賞)
参考: ・木越先生祝賀記念会編『時を測る』1990年
・木越邦彦「私のRI歴史」『Isotope News』No.713,14-19、2013年 ほか

*年代測定に関して更に詳しく知りたい方には、木越邦彦著『年代を測る』(中公新書、1978年)や、前述した理学部ホームページ内の年代測定に関する解説がお勧めです。

小谷正博学習院大学名誉教授(理学部化学科)より、当時の状況を大変詳しくご教示いただきました。深く感謝申し上げます。

「財団設立関係資料」 —私立学習院を支えた人たち—

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

1994(平成6)年、学習院大学五十年史の編纂事業が始まり、9月に大学五十年史編纂室が設置された(のち総務課院史資料室に吸収され、現在の学習院アーカイブズに至る)。設置と同時に、事務倉庫に残されていた古い簿冊の束が運び込まれた。早速その資料群の整理、つまりどのような作成年代・内容であるかの確認と目録の作成を始めたところ、特に劣化の激しいわら半紙が挟まれたファイルの冒頭の文書(図1)に、下記のような会合のメモが記されていた。



図1 1946年9月1日会合メモ

21.94 院長官舎ニ於テ 山梨院長、富永教授、浅野事務官、浅野長武侯、三島通陽子、三島通隆氏、明石元長男、小山直彦 会同

具体的対策ノ時期ニ達シタルモノト思フ、昨年10-11月頃特権学校ハ止メサストノ司令部ノ意見ガ新聞ニ出タリラジオデ云ハレタガ根拠ナシ 但シカ、ル意向ハアリ、「ダカラ学習院ハ止メニナル」トイフコトハウソデアツタ、石渡宮相カラ評議員会ニカケテ早く対策ヲ講ゼヨトイフコトナリ、12月7日ノ学習院学則ノ改正ニナツタ 表面的ニハイデオロギーノ問題ハ解消シタ。カウナレバ必ズシモ宮内省ニツイテキル要ナカルヘシ(ダイク代将) 用意(離レルタメノ) ガイルトイフコトデダイクノ方ハヨサマル。宮内省側デハ財政上学習院ヲ保ツテ行クコトガ出来ナイトイフ問題ガ起ツタ(本年1-2月頃) 寄附金モ実際問題トシテハ期待出来ナイ。ソノ頃カラ人件費ノ膨脹〔後略〕

会合は1946(昭和21)年9月4日、学習院とその同窓会である桜友会代表との間で行われ、山梨勝之進院長より桜友会に対し、学習院の存続と財団法人化に向けての援助が要請された。山梨は同年7月よりCIE(GHQ民間情報教育局)と学習院存続に向けての交渉を続け



図2 小山直彦(1899~1976)

ており、引用箇所は山梨による1945(昭和20)年以降の経過説明の部分である。文面からは財政上の問題等から学習院存続が流動的な状況にある緊張感が漂っている。

このメモは、会合に桜友会の一員として参加した小山直彦(図2)によって記された。小山は1920(大正9)年に学習院高等科を卒業後、京都帝国大学法学部を経て大蔵省に入省、専売局財務局長などを歴任し、1946年から日本銀行監事をつとめていた。同年9月16日、学習院財団準備委員会が結成され、小山は桜友会代表として委員に加わった。翌1947(昭和22)年の財団法人学習院発足時からは監事および評議員に就任し、さらに1952(昭和27)年から1971(昭和46)年まで学校法人学習院常務理事をつとめた。山梨勝之進・安倍能成・麻生磯次院長のもとで、学習院の財団改組と私立学校となって以降の経営を長きにわたり支えた人物である。

冒頭の文書が挟まれたファイルには名称がなかったため、「財団設立関係資料」と名付けて整理を行ったところ、学習院にとって激動の時期であった1946年から47年にかけて作成された文書89点が綴じられていた。各文書には小山の書き込みが多く記されていて、組織的に保存された公的な文書とは異なる時代のリアリティを感じることができる。作成・利用後70年を経たわら半紙の文書は、酸性劣化が進行して折り目から裂けてしまったものも多く、学習院アーカイブズでは脱酸処理ならびに補修を進めてきた。補修にあたって文書群を見直した際、改めてそ

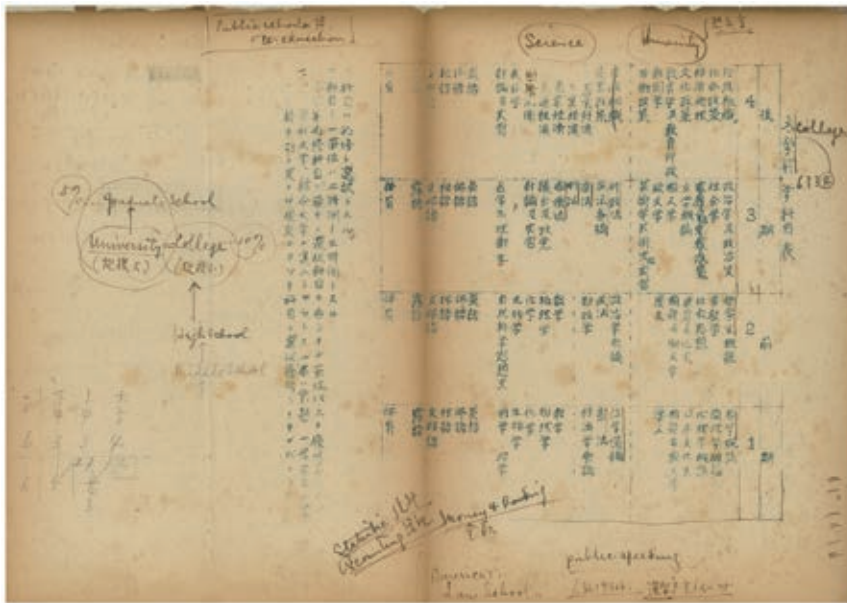


図3 「大学科学科目表」(1946年12月12日)

の歴史的価値を再認識したのだが、その事例を紹介する。

図3は「大学科学科目表」と題する1946年12月12日付の文書で、管見の限り学習院大学のカリキュラム案として最も早い時期のものである。翌1947年4月に学校教育法が施行されて6・3・3・4の学校制度が形成されていくが、1949(昭和24)年度から発足する4年制の新制大学のカリキュラムも、このときすでに検討がなされていたことがわかる。文書には「middle school→high school→university(規模大)=college(規模小)…10%→5%…graduate school」、「人数ノ少イコト」、「演習ヲ主トスルコト」などといった小山の書き込みが加えられ、新制高等教育とはいかなるものであるかについて模索していた様子がうかがわれる。1946年9月、CIEは存続交渉のなかで、新たな学習院の教育理念として“School of Government”という政治・行政面での指導者育成を示唆していた。「大学科学科目表」でも「後期」と記された3・4年次に法学・政治学・行政学をはじめとする科目が列挙されている。また、新制大学の特色のひとつである「体育」も、すでに学科目表に盛り込まれている。

財団法人学習院が発足し私立学校となって間もない時期、財政上の苦境が続いたことは、『学習院百年史』『学習院大学五十年史』といった沿革史や安倍能成の著作等でも述べられている。「財団設立関係資料」に収録されていた1947年10月15日付文書「昭和二十四年度以降ノ経理上ノ見透シニツイテ」には、「財政上ノ抛り所ヲ何処ニ求ムベキカ。凡ソ左記ノ

方法」として、8項目が列挙されている。

- 一、必要経費ノ金額ヲ父兄及先輩ノ負担ニ仰グ方法
 - (a) 授業料一本ニヨル
 - (b) 授業料及学習院後援会ノ手ニヨル母会費等ノ抛出一、寄附金ノ継続的募集
- 一、米国内府(国家)ノ援助
- 一、所有不動産ノ処分
- 一、入学又ハ卒業ニ際シ一定額ノ寄附ヲ条件トスル方法
- 一、学習院債ノ募集
 - (一、官立学校ヘノ編入)

同文書には「非常ニ困難ナ事柄モアルベク既ニ不可トセラレテオルモノモアリ(略)ソノ中ノ何レヲ可能且ツ良シトセラルルヤ、尚他ニ良策アリヤ」と付記されていて、「所有不動産ノ処分」や「官立学校ヘノ編入」など、占領期間中の制約のため「不可」が明らかだった方策でも挙げざるを得ない窮状にあったことを示している。そして翌1948(昭和23)年1月、財団法人学習院と学習院後援会の連名による「学習院の将来計画と寄附募集について」と題する小冊子が作成・送付されて、「一千万円募金」が開始された。

「財団設立関係資料」の文書には、小山をはじめとする私立学習院誕生に携わった人々の苦闘の痕跡が記されている。見た目は粗末なわら半紙や罫紙ばかりだが、学習院の歴史を伝えるうえで一級の資料であることは確実である。この文書は幸いに保存措置を講ずることができたが、学習院アーカイブズには同様に酸性劣化した文書資料が大量に残されている。デジタル化も含め、それらをどのようにして後世に残していくかが大きな課題である。

なお、財団発足時の常務理事として、小山と同様に学習院の経営を支えた水田直昌(1897～1985)が所蔵していた文書も学習院アーカイブズに残されており、保存措置ならびに研究分析が求められる。山梨院長や安倍院長を下支えし、私立学習院出発の困難を共に乗り切ろうとした小山直彦や水田直昌の功績も、文書に基づいて改めて検証される必要があるだろう。

明治期、学習院が独自の外国語教科書で学ばせたかったもの

学習院アーカイブズ 小根山 美鈴

1. はじめに

明治期に学習院が独自で編纂した教科書群のうち、特に外国語教科書の編纂は他に類を見ない。一見無機質な教科書、実は学習院が編纂に尽力した時代があった。本稿では、外国語教科書の編纂を紹介すると共に、学習院が当時目指していたものとは何かについて、若干の考察を加える。

2. 基礎となる『学習院初学教本』¹⁾

外国語教科書を語る前に、『学習院初学教本』（以下、『初学教本』と称する）という国語読本の存在を押さえる必要がある。『初学教本』は、1893（明治26）年10月～翌年8月にかけて出版された、全12巻から成る初等学科（現在の初等科）教科書である。1889（明治22）年2月11日、大日本帝国憲法発布と同時に貴族院令が公布され、華族は政治上の特権と義務を与えられることとなり、華族子弟の教育が重要視されるようになった。この状況下、当時の三浦梧楼院長は、それまでたびたび学習院の諸規則が変更されたことを「大害」とし、教育方針および教育体制を確立するため、学習院学制の改革を行った。その教育方針は「学習院教育要領」として印刷・配布され、1890（明治23）年7月28日、新たな学習院学則が制定された。

これにより、従来の学科目の編制を廃し、新たに国漢文課・数学課・欧文課など10種の教課（現在の教科）に分け、各教課を通じて道徳の養成を図る方針を採った。したがって、それまで一課目扱いだった修身・倫理等を廃止することにより、これまで使用していた文部省編纂の小学読本に代わる読本の編纂の必要性が生じた。それがこの『初学教本』である。

本書刊行の他に、学習院は既に各種の教科書を編纂・刊行しており、1891（明治24）年10月16日発行の『学生用習字帖』を皮切りに、国定教科書に切り替わるまでの約10年間、学習院独自の教科書編纂が行われた。外国語教科書もこの流れに基づく。

3. 外国語教科書の編纂

「教務録 自明治二十七年至同三十年」（学習院アーカイブズ蔵）（図1）に、1894（明治27）年9月27日、学習院長田中光顕発信の通知書が綴じられている。学習院次長高島信茂を英独仏語読本編纂整理委員とし、各国語編纂委員として、教授兼幹事工藤一記、教授高崎行一（英語）、大村仁太郎（独語）、森則義（仏語）を下命した文書である。ちなみに、高島は前述の『初学教本』編纂の中心的人物だった。

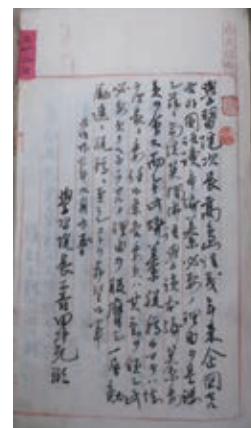


図1「教務録」

また、英独仏語読本の編纂にあたり、委員による基本方針や人員等に関する要望書も綴じられている。基本方針とは、第一に『初学教本』の綱領に基づく翻訳と資料収集をすること、第二に、翻訳はその精神を訳すことであり、些事に拘泥せず適宜調整することの2点である。ここで言う初学教本の「綱領」、「その精神」が、前記の道徳により、「児童ノ徳性ヲ涵養シ智能ヲ啓発スル」（『本書編纂凡例』『初学教本 壹ノ巻』）ことを指す。

このような編纂体制が敷かれ、実際に次の教科書が出版されることになる。

4. 英独仏語読本とは

現時点で確認できる学習院編纂の外国語教科書は、表1の通りである。左から3列目の「言語」は、テキストで用いられる言語の対応関係を表す。例えば1の場合、フランス語のみで日本語は使用されていない。6、7の場合、フランス語の単語や文法・例文を日本語で説明している。これら全体を見る限り、中等学科（満12～18歳）以上の教科書と考えられる。

さらに内容を確認すると、実に興味深いことがわかった。

表1 学習院編纂、外国語教科書一覧²⁾

	タイトル (発行年月)	言語	所蔵
1	仏語読書入門 (M26.10)	仏-仏	東書文庫 ³⁾ 他
2	仏語読本 一卷・同附 (M27.4)	仏-仏	国立国会図書館
3	PRIMER AND FIRST READER (M28.9)	英-英	学習院大学図書館他
4	Deutsches Lesebuch für die Bedürfnisse des deutschen Sprachunterrichts (M28.9)	独-独	学習院大学図書館他
5	仏文読本 第一 (M28.11)	仏-仏	国立国会図書館
6	仏蘭西文法教科書 (M30.4)	日-仏	学習院大学図書館他
7	補正再版 仏蘭西文法教科書 (M32.9)	日-仏	学習院大学図書館

(1) 日本語訳から滲み出る個性

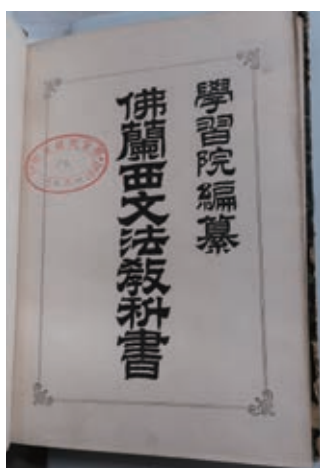


図2『仏蘭西文法教科書』⁴⁾

6『仏蘭西文法教科書』(図2)の凡例によると、この教科書は、中等学科第2年、第3年級仏文課学生向けの教科書として編纂された。仏文課とは、欧文課という課目をさらに英文課、仏文課、独文課に分けたうちのそれである。当時の学習院における外国語教育

は、英・仏・独の各3か国語のうち一か国語を専修させるカリキュラムだった。この学習院独自のカリキュラムについては、度重なる変更の経緯があるが、紙面の都合上割愛する。

他方、この教科書には、日本語でフランス語を説明する単語一覧表が掲載されている(図3)。例えば、「Le directeur」という用語に「院長」という日本語をあてている。学習院ならではの訳語と言えるのではなかろうか。

単語	
Le directeur,	院長、校長
le professeur,	教師、先生
l'eau, f.	水
la pluie,	雨
la nuit,	夜
qui?	誰
où?	何處
l'habit, m.	上

図3「Le directeur」の日本語訳

(2) 随所にちりばめられた『初学教本』の例文

3『PRIMER AND FIRST READER』(図4)の

うち、「Lesson2: A KIND BOY」の例文を読んだ際、どこかで目にした覚えがあった。もしやと思い、『初学教本』を探ると、三之巻「第二十一課 親切なる小児の話」と同内容であることがわかった。このことから、『初学教本』の英語訳を当該書に用いたと考えられる。他の例文にも『初学教本』と重なるものが多かった。



図4『PRIMER AND FIRST READER』

同様に、4『Deutsches Lesebuch für die Bedürfnisse des deutschen Sprachunterrichts (「ドイツ語教育必修 ドイツ語読本 (筆者訳)』)』の、例えば、読み方の例文「41. Die Eltern (両親)」は、『初学教本』三之巻「第五課 おや」の文章をドイツ語翻訳していることがわかった。しかし、『PRIMER AND FIRST READER』よりも、『初学教本』の翻訳文を掲載している数は少なかった。

以上、足早に2種の教科書を紹介した。両者に通じることは、ただ単に語学を教授するにとどまらず、前記の「学習院教育要領」に基づき、修身・道徳の精神を外国語教科書にも反映させるため、『初学教本』を見本とし、所々に翻訳を含めたことと推測する。これは、当時の学習院が目指す教育のあり方を、教材に投影させた一例と考えられる。

5. おわりに

学習院の外国語教育の歴史は古く、他方では、初等科の英語教育の変遷も興味深い。いずれは他校との比較研究なども行い、教材とその出版経緯や事柄を結び付ける記録、関連ある情報を蓄える「学習院教育資源アーカイブズ」なる構想を密かに膨らませている。

- 1) 以下のサイトで全文閲覧可能。国立教育政策研究所教育図書近代教科書デジタルアーカイブ：<https://www.nier.go.jp/library/textbooks/> (アクセス日：2021年1月13日)
- 2) 表1のうち、学習院大学図書館所蔵の教科書には貴重書が含まれる。利用については大学図書館ホームページを参照し、所定の手続きを踏むことを要する
- 3) 正式名称は、東京書籍株式会社附設教科書図書館 東書文庫
- 4) 図2～4の写真は学習院大学図書館所蔵本を撮影

参考：学習院百年史編纂委員会編『学習院百年史』第一編 (学校法人学習院、1981年3月31日)

主な活動 (2020年7月～2021年1月)

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②非現用文書ファイルの評価選別 (8部署)

◆学内各部署に保存されている資料の調査・整理

- ①初等科所蔵資料の調査 (8月6、7日)
- ②中等科体育倉庫資料の選別・整理 (7月～9月)

<中等科体育倉庫資料調査の様子>

(1) 倉庫から搬出



中等科教員による体育倉庫内の一斉整理時に、学校行事関係の資料も搬出。当室スタッフは、段ボール箱ごとに入っている資料の概要を記録。

(2) 調査・選別



搬出した段ボール16箱について、全資料の概要調査を開始。これらの中から、歴史的資料として保存対象となる資料を選別 (第一次選別)。

(3) 仮目録の作成



資料群の内容は学校行事 (沼津游泳、運動会、附属戦、クラスマッチ他) で、昭和15～令和2年と幅広い。写真は入賞者へ贈るビクトリーバッジのサンプル。昭和36年製か。

(4) 仮整理終了



仮目録の作成後、新規の文書保存箱に入れ替え、仮保存。今後、移管に向けて担当教員と相談し、受入のためのクリーニング措置や選別計画を立てる予定。

◆所蔵資料の整理・保存

- ①移管文書の選別・整理・目録作成
- ②明治期～戦前公文書等の再整理 (2,000点)
- ③学内刊行物、書籍の収集・整理
- ④「財団法人設立関係史料」を対象とした酸性劣化資料の保存修復

◆資料等のデジタル化

<資料>

- ①「土地建物録」(大正11～昭和21年、5点)
- ②「財団法人学習院設立認可申請書」(昭和22年)、「学習院大学科設置認可申請書」(昭和23年)
- ③大学卒業アルバム (昭和54、56、59年)
- ④女子学習院卒業生 (昭和15年高等科) 所蔵写真アルバムの借用、デジタル化



『学習院百年史』デジタル化に伴い、正誤表 (写真下方) の最新版も作成した。

<書籍>

『学習院百年史』
全三編
『学習院の百年』



女子学習院でのスナップ (昭和15年)

◆資料受入れ

- ①女子学習院幼稚園・学習院初等科在学時 (昭和18～19年) 日誌の借用、一部撮影
- ②安倍能成「私の自叙伝」(NHKラジオ番組録音DVD)

◆その他

- ①学習院百周年記念会館3階展示コーナー 展示内容の一部変更

学習院アーカイブズ・ニュースレター第17号
2021 (令和3) 年2月20日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285 (直通)
事務室 西5号館 (本部棟) 地下1階
<https://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>